

心をつなぐ

広島市立広島特別支援学校
高等部第2学年 山田 悠太郎

体験レポート

「心をつなぐ」

広島市立広島特別支援学校

高等部 2 年 B 組 山田悠太郎

私たちの広島市立広島特別支援学校高等部普通科職業コースでは、平和な世界の実現ために広島市民としてできることはないかと考え、平和を願う「ヒロシマの心」を継承する二つの取組を行っています。それは被爆桜を受け継ぎ育てることとカンナプロジェクトへの参加です。

1. 被爆桜の継承

原爆によって幹が焦げてしまいもう花が咲かないように見えた「被爆桜」をもらい受け育てる活動です。きっかけは3年前の全国高等学校総合文化祭で「さくらよ」という被爆桜の歌を合唱したことでした。「さくらよ」という歌に関する音楽の学習で被爆桜が実際に存在することを知ったある女子生徒が「うちの学校にも被爆桜を植えたい。」という思いを持ち、校長先生にお願いしました。その願いを聞いた校長先生が安田女子高等学校の校長先生に頼んでくださり、被爆桜の苗をも



らうことができるようになったのです。

それから1年後、本校の3年生（卒業生）が安田女子高等学校に行き、生徒会の生徒と交流して被爆桜について話を聞き、被爆桜にもその苗木にも会うことができました。そしてその苗木はその翌年の2月にやってきました。小学部の児童も参加して植樹式を行いました。私たちが1年生の冬でした。

それまでも入学して「さくらよ」という歌についての授業を通して私は被爆桜について知る機会がありました。その授業で被爆桜についての先生の話聞き、原爆で焦土と化した広島の大地上に翌年から美しく花を咲かせた桜の生命力に感動



しました。原爆でたくさんのもを失って絶望の淵にあった広島の人たちに、幹を真っ黒に焼かれた桜が咲かせた花がどんなに生きる力を与えたのかということにも思いをはせました。

そして本校にやってきた被爆桜が今年の春に小さな花を咲かせたのを見たとき、その小さな花が何かを伝えてくれたのを感じました。

この取組を被爆桜を育てることだけで終わらせてはいけなと考えた職業コースの先輩が、「被爆桜」の継承の取組を全校に伝えたいと考えました。先輩たちはこれまでの取組を私たち2年生や1年生に教えてくれました。さらに私たち下級生は、小・中学部の児童生徒に伝えていくため



に先輩から聞いた話をもとに、紙芝居を作成し、伝えることにしました。8月6日に起きた惨劇や被爆桜継承の意味を分かりやすく伝えるには、話し方や間の取り方など、意識しないといけないことがあるので私たちは練習を重ねました。紙芝居は、美術の授業で学んだ技法を使って、先生に描いていただいた絵を着色して作り、話も自分たちで考えて作りました。紙芝居のシナリオは私が考えました。紙芝居は、パワーポイントを使って行うこと



にしました。みんなで係を分担し、読み手と提示する人がタイミングを合わせるように練習しました。また、文章を読むときに速くなったり、言葉に詰まらないように学級の中で聞き合って改善点を見付け合ったりもしました。そして、たくさんの練習を重ね、小・

中学部の学級へ向けてのグループ分けをし、行き先を決めました。小・中学部紙芝居訪問は緊張しましたが、みんなで力を合わせて楽しく行うことができました。小・中学部の児童生徒のみんなは、たくさんの質問をしてくれ、それについて先生に教えてもらいながら答えたり、自分たちで調べたりしたことで更に被爆桜に関する知識を深めました。自分で考えた文章の紙芝居で小・中学部の児童生徒に被爆桜のことを知ってもらうことができただけでなく、紙芝居という方法を通して、自分たちが継承したいと考える「ヒロシマの心」を伝えることができるということを知ることができました。

2. カンナプロジェクトへの参加



朝日新聞の松本栄一カメラマンが爆心地から800メートルの広島市基町（現・中区）で撮影したカンナ。「75年は草木も生えぬ」といわれただけに「何か不思議な気がして、思わずシャッターを切った」という＝1945年9月

（2010.8.4.
デジタル朝日の記事から）

ヒロシマの心をつないでいくプロジェクトのカンナプロジェクト参加への取組です。2004年当時は誰も知らなかったと言われる広島のカンナの花については、広島原爆投下から1か月で爆心地から820m離れたところにカンナが咲いたというものです。そのときのカンナは今は写真に残されているだけですが、そんな力強いカンナの事実を伝え、「子どもたちとカンナの花のバトンをつなぎ、バトンをつないだお互いが想いをはせ合うことで子どもたち自らが平和な未来をつくることを育む」というのがカンナプロジェクトです。



そんなカンナプロジェクトに興味をもった私たちの学校が、このカンナプロジェクトに参加して今年で3年目になります。カンナを受け継ぎ育てることを続け、昨年末には私たち職業コース2年生でカンナをグラウンド後方の花壇に植え替えました。私たちの学校のグラウンドには、今年の夏も真っ赤なカンナがた



くさん咲きました。私が初めてカンナを見たのは、1年生のときの授業で植えたときでした。まだ小さな苗でした。日々、成長していくカンナの姿を見て、日々の私たちの学校生活に似ていると思えることがあります。明るく・元気に・たくましく授業に臨むときや、何かに悩んでつまずいたときにも真っ赤なカンナの花は勇気をくれます。



3. ヒロシマの心をつなぐ

私たちは、戦争のない平和な社会が永久に続くことを願って私たちが被爆桜の継承とカナプロジェクトに取り組んだことを伝えたり、広島から世界に平和のメッセージを発信したりできないかと考えました。その機会は8月6日に平和公園の中にある国際会議場・フェニックスホールで開催される「ひろしま子ども平和の集い」に参加するという形で実現しました。私たち職業コースは昨年、今年と2度にわたってこの平和の集いに参加しています。昨年は平和アピールを行い、「さくらよ」を合唱しました。今年は、1学年から3学年までの47名で2度目の平和アピールを発表し、広島出身の大木惇夫さんが反戦・平和の願いを込めて作詞した「大地讃頌」を合唱しました。先輩の濱田君の取組の説明や思いを聞きながら、また、自分たちの活動の意味や使命について考えました。そして、アピールを力一杯発表し、「大地讃頌」も思いを込めて歌うことができました。さらにその集いでは、日本全国から集まった中高生の団体の発表がありました。それらの発表を聞くことよって新しい発見があり、平和への意識を更に深め、またそれぞれの価値観に触れ、それらを共有することができました。



このような経験を通して、私は70年以上前、原爆で焦土と化し、草木も生えないと言われた広島の人々に希望を与えた被爆桜やカナを継承する意味を考え、平和への思いを新たにしました。そして、今、平和を願うヒロシマの心をつないでいくことが私たちの使命であると考えます。

指導者の言葉

広島市立広島特別支援学校高等部普通科職業コースでは、3年前から、総合的な学習の時間や社会科で行った平和学習で、「ヒロシマの心をつなぐ」取組を行ってきました。それは、被爆桜やカンナを継承して育てることや、平和を願う心を歌やアピールなどで伝えることです。

この体験レポートは、その取組に参加した体験をまとめたものです。平和学習の中で、山田君は平和への思いや取組について考えたことなどを自分の言葉で、読み手の心に迫るような表現で書くことができました。そこで夏休みの課題として平和学習の取組内容を体験レポートにするよう提案しました。山田君が夏休みを使って作成したレポートをHRの時間に学級で読み合わせをして、内容を付け加えたり、教師が文章指導をしたりして仕上げいき、このレポートを完成させました。

職業コースの平和学習のテーマは「心をつなぐ」で、ヒロシマの平和を願う心を世界に発信していこうというものです。生徒にはテーマの意味や、被爆桜の継承やカンナプロジェクトなどの平和への取組が世界を変えていく力となる可能性を秘めていることなどを、授業のたびに伝えてきました。山田君はそれらの意義を理解し、取組の経験から学んだことを自分で考え、レポートをまとめることができました。